

評価の客観性を高めるモデレーションプログラム

岡山県立岡山東商業高等学校教諭 福岡 明広

1. 評価の客観性を高める

平成12年12月に教育課程審議会から答申された「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について（以下「答申」という）」を受けて、平成13年4月に文部科学省から児童生徒の指導要録の改善の通知が出された。その中で、各教科の学習の記録が全面的に目標標準評価になった。

国立教育政策研究所教育課程研究センター（以下「国研」という）からは、各学校が評価規準作りや評価方法の工夫をする際の資料として「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料」が出された。各学校ではその資料を参考に、各教科の評価規準作りや評価方法の工夫・改善が行われている。

そのような状況の中で現在、最も求められているのは評価の客観性の向上である。答申においても、一章を割いて、児童生徒の学習状況を客観的に評価するための方策が述べられており、その中で、各学校における目標標準評価の客観性、信頼性を高めるようにすることが必要である旨が示されている。

評価の客観性とは、妥当性と信頼性から成り立っている概念とする。妥当性とは、「評価しようとしている児童生徒の学習状況を、用いる評価規準と評価方法で確かに評価できているという適切性」ととらえる。また、信頼性とは、「ある児童生徒の学習状況を、複数の教師が同一の評価規準と評価方法で評価したときに、どの教師も同じ判定をするという評価の一貫性」ととらえる。そして、妥当性と信頼性の両方を高めることで、評価の客観性は高まると考える。

(1) 評価事例集

国研の参考資料には、各教科等の単元の評価事例が掲載されている。掲載されている事例の構成は、教科によってまちまちであるが、おおまかに言うと、まず、単元の目標が記され、次に「単元の評価規準」「指導と評価の計画」「観点別評価の進め方」が提示され、最後に「観点別評価の総括」について触

れられている。観点別評価の進め方には、評価規準に基づいて「十分満足できる（A規準）」「おおむね満足できる（B規準）」「努力を要する（C規準）」の判断基準が具体的な文言で記述されている。

ところが、記述を幾ら具体化しても、実際に教師が同じように評価規準を適用しているかどうかは分からない。

つまり、教師個々によって評価規準の解釈が相違し、評価がばらついて信頼性が低下するおそれがある。このように評価規準の解釈や適用に相違があると、評価の結果が上級学校の入試など外部の評価に用いられる場合には、児童生徒に不公平が生じてしまう。

そこで、評価規準の文言を詳しく記述するよりも、評価規準と規準を達成している状況が具体的に分かる評価資料とが併記された評価事例集（図1）があれば、教師はそこに掲載されている評価資料を参照し、適切な評価がしやすくなるのではないかと考えた。すなわち、評価事例集を参照することで、教師による評価のばらつきが小さくなることを期待した。実際、イギリスやオーストラリア、アメリカ等では、このような評価事例集を用いて評価を行い、客観性の高い評価を実現している。南オーストラリア州では、この評価事例集を work samples と呼んでいる。

なお、ここで言う「評価資料」とは、ある評価方法を用いて評価する際に、児童生徒の学習状況をよく表している具体物のことを指す。例えば、「レポ

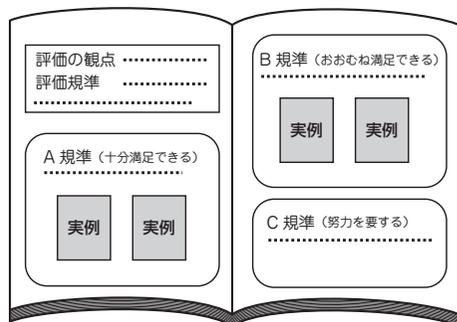


図1

ート」という評価方法を用いたときには、実際に児童生徒が書いたレポートそのものが評価資料となる。

(2) モデレーション

南オーストラリア州では、教科ごとに委員を数名任命し、その委員が集まり、評価規準や評価方法として用いる評価資料を検討し、妥当性を高めた上で work samples を作っている。さらに、州内の学校において信頼性の高い評価が行われるように研修会がなされたり、コーディネーター（指導主事に相当する教師）が学校における評価活動の指導をしたりしている。

我が国においても、教育委員会や教育センターが委員を任命して評価実例集を作成することが考えられるが、特定の教師だけで作るのでは負担が大きすぎるし、仮に作られても、トップダウンになり、実際の授業では活用されずに形骸化してしまうおそれがある。できるだけ多くの教師が評価実例集作りにかかわることが評価実例集の活用にもつながると考え、研修会などで多くの教師が協議をしながら作り上げることができる方法はないかと考えた。そして、海外で行われているモデレーション（評価の一貫性を確保するための方法）という手法に注目した。

なかでもグループモデレーションとは、各学校の教師が、自分たちの評価した児童生徒の事例を持ち寄って検討する会合を持つことである。イギリスやオーストラリアでは、州、郡、地区、各学校など様々な範囲で、同一の教科を担当する教師が集まってモデレーションが実施されている。南オーストラリア州では、work samples に示された評価と、教師の評価との間に差異がないよう調整するためにモデレーションを行っているが、我が国では、評価実例集を作るために、多くの教師が集ってモ

デレーションを行い、評価実例集を作成する手続きとなるモデレーションプログラムを実施するのがふさわしいと考える。

(3) 参考とする事例

オーストラリアのビクトリア州の教育省は SOFWeb というサイトを開設し、consistency of teacher judgement というコーナーを設けて、評価の統一を図ろうとしている。

そこで紹介されているモデレーションの手順は次

**高等学校商業流通ビジネス分野 ビジネス基礎
「外国人とのコミュニケーション」の指導と評価の計画表** (20単位時間)

目標

- 国際化の進展に伴い、ビジネスにおいて外国人とのコミュニケーションの機会が増加していることを理解させるとともに、聞くこと、話すことなど、態度を変えた基本的なコミュニケーションの方法を習得させる。
- 外国人に対して、相手の立場を尊重し積極的に交流するなど、ビジネスにおいて外国人と円滑にコミュニケーションを行うための心構えについて理解させる。

内容

- コミュニケーションの方法
 - ・気候に声を発し、会話の楽しさを実感させる。
 - ・会話でよく用いられる簡単な表現に慣れさせる。
 - ・感情をあらわす表現をオーバーにやってみる。
 - ・ジェスチャーによるコミュニケーションにも親しませる。
- コミュニケーションの心構え
 - ・外国の文化や習慣を知ることが大切であることを理解させる。

評価規準

- 外国人とのコミュニケーションに関心をもち、国内においてビジネスで外国人と接する場合のコミュニケーションの方法や心構え及び日常の会話について自分からすすんで意欲的に取り組もうとしている。(関心・意欲・態度)
- コミュニケーションの方法や心構えについて様々な角度から主体的かつ客観的に考察するとともに、日常の会話を考え外国人とのコミュニケーションの諸問題をとらえる視点や方法を考察している。(思考・判断)

単元 時数	コミュニケーションの方法		コミュニケーションの心構え		
	4		4		
学習活動	・外国人とのコミュニケーションの必要性を考える。	・外国人との挨拶を考え、インテークションを取り入れ日常生活での挨拶をする。	・外国人とビジネスシーンでの挨拶を考え、名刺交換する。	・外国人のマナーや、習慣、ジェスチャー、言語活動などの文化理解についてのテストシートに挑戦する。	・地域経済や生活について調査し、その調査内容を英語表記したものを発表する。
教師の支援と教授	・国際化の進展に伴い、ビジネスにおいて外国人とのコミュニケーションの機会が増加していることに気がつかせる。	・VTRや教師の指導で日常一般的な挨拶を覚えておくか、コミュニケーションの機会を増やしていることを意識させる。	・VTRや教師の指導で日常一般的な挨拶を覚えておくか、コミュニケーションの機会を増やしていることを意識させる。	・比較的高いレベルの英語力を持つ外国人のインタビュー、言語行動の理解度チェックシートを作成し、解答させる。	・情報手段の活用できる環境を整え、生徒自ら情報収集を行い、再構成させる。
関心・意欲・態度	・外国人とのコミュニケーションに関心をもち、コミュニケーションの方法について自分からすすんでまとめたり確認したりしようとする。(行動観察法)		・ビジネスで外国人と接する場合のコミュニケーションの心構えについて関心をもち自分からすすんでまとめたり確認したりしようとする。(行動観察法)		
思考・判断	・外国人とのコミュニケーションの方法から主体的かつ客観的に考察しようとする。(作品法・ノート)	・外国人とのコミュニケーションの方法から主体的かつ客観的に考察しようとする。(作品法・ノート)	・ビジネスで外国人と接する場合のコミュニケーションの心構えについて様々な角度から主体的かつ客観的に考察しようとする。(作品法・ノート)	・ビジネスで外国人と接する場合のコミュニケーションの心構えについて様々な角度から主体的かつ客観的に考察しようとする。(作品法・作品)	
技術・表現	・日常生活一般的な挨拶に必要な単語や短文を適切に使い分け、インテークションを適切なコミュニケーションの方法で適切に表現する。(自己・相互評価法)	・ビジネスシーンでの挨拶に必要な単語や短文を適切に使い分け、コミュニケーションの方法で適切に表現する。(行動観察法)		・ビジネスで外国人と接する場合のコミュニケーションの心構えに関する資料や情報手段を適切に選択して活用し、適切に表現する。(行動観察法)	・ビジネスで外国人と接する場合のコミュニケーションの心構えに関する資料や情報手段を適切に選択して活用し、適切に表現する。(自己・相互評価法)
知識・理解		・ビジネスシーンでの挨拶に必要な基礎的な・基本的な知識を身につけて、活用することができる。(テスト法)		・ビジネスで外国人と接する場合のコミュニケーションの心構えに関する基礎的な・基本的な知識を身につけて、活用することができる。(作品法・ノート)	

表 1 - 1

のとおりである。

- ①単元・授業を選び、評価規準、評価方法を定める。
- ②授業のなかで評価活動を行い、児童生徒の評価資料（レポート、作文、作品など）を収集する。
- ③各教師は自分なりにその評価資料を評価する。
- ④そのなかから幾つか評価が難しかったものを選ぶ。
- ⑤選択した評価資料を持ち寄る。その会合で他の教師にその評価資料を評価してもらい、自分の行った評価と比較する。

⑥教師の間で評価が一致するよう協議し、合意を得る。

⑦自分と他の教師の評価の違いや、自分はどの点に注目して評価したかなどを話し合う。

⑧協議したことを振り返る。

これらは、評価規準の解釈の議論を通して、各教師が日頃の学習指導の向上の機会となることもねらいとしている。

2. モデレーションプログラムの実際「ビジネス基礎」—外国人とのコミュニケーションを題材に—

モデレーションプログラムは、各学校での校内研修会や教科会議等で実施されることを期待している。その際、同教科あるいは同学年を担当する教師が集まって小グループを作ることが前提となる。小グループの人数は3～6人とする。理由は、その人数が一人ひとりの参加意識を高める上で有効であるという経験則からである。また、協議が特定の教師だけの意見によってリードされないようにグループ内で司会者を決め、手順に沿って協議が進むようにしておく。

①「指導と評価の計画」をはじめに作る

単元の「指導と評価の計画」(表1)を作るステップをモデレーションプログラムの最初の部分に設定する。しかし、国研の評価事例に提示されている「指導と評価の計画」は数ページにも及ぶ詳細なものもあり、プログラムのなかでこれを作るのは困難である。そこで、単元が一覧できる簡便な表1のような「指導と評価の計画」を作る必要がある。

しかし、その計画表でさえ、作るとなると時間がかかる。そこで、既に各学校で開発の進んでいる「指導と評価の計画」を持ち寄るとか、教科書会社が提供しているものを参考にすることで、時間の短縮を図ることが必要に

- (3) 国内において外国人と接する場面を取り上げ、日常よく用いられる身近な会話に慣れ親しめるとともに、我が国の日常生活の過ごし方を外国人に正しく紹介するための、基礎的な知識を習得させる。
- (2) コミュニケーションの心構え
 - ・自国の文化や習慣を相手に知ってもらおうとする姿勢が大切であることを理解させる。
 - ・外国人との付き合い方をイメージさせながら、国際マナーを紹介する。
- (3) 日常の会話
 - ・挨拶と紹介のシチュエーションで会話を楽しむ。
 - ・ファーストフード店などのシチュエーションで会話を楽しむ。
 - ・会社オフィスなどのシチュエーションで会話を楽しむ。
- (4) 外国人とのコミュニケーションに関する様々な資料を適切に選択して活用し、ビジネスと外国人とのコミュニケーションの関わりについて客観的に把握し、コミュニケーションの方法について考え、適切に表現している。(技能・表現)
- (5) 外国人とのコミュニケーションに関する基礎的・基本的な知識を身に付け、ビジネスの語活動に活用している。(知識・理解)

日常の会話	
1	2
・オフィスシーンを想定し、外国人への対応(電話・訪問)をロールプレイングする。	・マーケティングシーンを想定し、取便シート(POP広告)をCMの製作をする。
・電話での対応と訪問を受ける際の例文を用い、VTR・Moの製作技術指導に教師による手順を模範させ、体験的に学習させる。	・単なる取便シート(POP広告)・CMの発表指導にならないように配慮し、事例を模範的に学習させる。
・オフィスで外国人に接する場面でのコミュニケーションの方法について関心をもち自分からすすんで気づきを主目的とし、質問を積極的にし、事例を模範的に学習しようとする。(行動観察法)	・企画会議で外国人に接する場面でのコミュニケーションの方法について客観的に考察しようとする。(行動観察法)
・オフィスで外国人に接する場面でのコミュニケーションの方法について客観的に考察しようとする。(行動観察法)	・企画会議で外国人に接する場面でのコミュニケーションの方法について客観的に考察しようとする。(行動観察法)
・オフィスで外国人に接する場面でのコミュニケーションに、様々な手段を通じて適切に表現し、適切に表現する。(相互評価法)	・ファーストフード店で外国人に接する場面でのコミュニケーションに関する様々な手段を通じて適切に表現し、適切に表現する。(行動観察法)
・オフィスで外国人に接する場面でのコミュニケーションに、基礎的な知識を身に付け、活用することができる。(テスト法)	・ファーストフード店で外国人に接する場面でのコミュニケーションに関する基礎的な知識を身に付け、外国発祥の模範がわかる。(ワークシート)

表1-2

なる。

②妥当性について検討した評価規準と評価方法を掲載すること

妥当性の高い実例を掲載するには「内容のまとまりごとの評価規準の具体例」を基にして評価規準を決め、それぞれの評価場面において、児童生徒の学習状況を的確に把握するのに最も適した評価方法を検討するステップが必要となる。評価規準にふさわしい評価方法はどれが最も適しているかという議論を通して、妥当性の高い評価規準と評価方法が掲載できると考える。

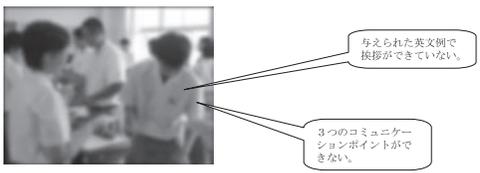
③評価実例集を作成し(表2・3)、B規準を達成するための手だてを示すこと

持ち寄った評価資料をただA、B、Cと判定して区分するだけでなく、Cと判断された評価資料をどのように指導すればB規準を達成させることができるか協議するステップを設ける。できればB規準をA規準に上げる手だてについて協議するステップも設けたい。

(B) おおむね満足：ビジネスシーンでの挨拶(名刺交換)に必要な様々な英文例を使い分け、3つのコミュニケーションの方法について表現している。



(C) 努力を要する：ビジネスシーンでの挨拶(名刺交換)に必要な英文例を使えず、コミュニケーションができない。



指導事項

- 英文例を確認させ適切な表現を練習させた。
- 表現力の豊かな相手とペアを組ませ真似るように助言した。

成果と課題

- 表現力の豊かな相手とペアを組ませることが功を奏して3つのコミュニケーションポイントの表現力は豊かになった。
- 英文例を確認させ適切な表現を練習させたが、すぐにできるようにはならなかった。継続練習の環境作りが必要とされる。



表2-2

表2 グループ・モデレーションの展開

評価の力量を高め、評価の統一を図る工夫(担当教師で協議)

評価の観点：外国人とのコミュニケーションの方法の技能・表現
 評価規準：ビジネスシーンでの挨拶(名刺交換)に必要な様々な英文例を適切に使い分け、コミュニケーションの方法について適切に表現できる。

上記の評価の観点と規準を考慮しながら外国人とのコミュニケーションの技能・表現を評価するために、次のような四つの具体的な評価項目を決定した。

1. ビッグスマイルで挨拶している。
2. シェイクハンドで挨拶している。
3. アイコンタクトで挨拶している。
4. 名刺交換に必要な例文を物怖じせずインターアクションを交えて表現する。



写真1 協議中の教師

あるクラスの行動を上記の四つの評価項目で採点し、(A)十分満足できる(B)おおむね満足できる(C)努力を要するの判断基準を次のように決めた。

(A) 十分満足	(B) おおむね満足	(C) 努力を要する
ビジネスシーンでの挨拶(名刺交換)に必要な様々な英文例を適切に使い分け、3つのコミュニケーションの方法について適切に表現している。	ビジネスシーンでの挨拶(名刺交換)に必要な様々な英文例を使い分け、3つのコミュニケーションの方法について適切に表現している。	ビジネスシーンでの挨拶(名刺交換)に必要な英文例を揃えず、コミュニケーションができない。

効率的に評価するための工夫

あらかじめ、行動観察のチェックするポイントを上記の四つ評価項目を決めておき、A.T.(Assistant Teacher)とその点をチェックしていた。

さらに、客観性を高めるために、生徒のアクションをカメラに納めておき、評価漏れがないか確認した。

評価の実際

(A) 十分満足できる：ビジネスシーンでの挨拶(名刺交換)に必要な様々な英文例を適切に使い分け、3つのコミュニケーションの方法について適切に表現している。



表2-1

④形成的評価の結果を補正する時期を明示すること

基本的には、その単元が終わるまで形成的評価による指導を続けることが望ましいが、評価方法によっては不可能な場合もある。その授業が終わった時点で記録するのか、もっと指導を続けるのか、結果を補正する時期について検討するステップを設ける。

⑤効率的に評価を行うための工夫を明示すること

用いる評価方法とその手続きで児童生徒の学習状況を記録するのに、1単位時間に1回することが可能になるような工夫について協議するステップを設ける。

⑥評価方法として、観察記録とレポート等を用いること

モデレーションでは、児童生徒の作成したワークシートやレポート等の具体的な評価資料を用いるので、必然的に評価方法はレポート等に

※編修部注：肖像権との関係で、表中の写真は人物が特定できないように処理してあります。

分類されるものを使うことが多くなる。一方、観察記録を評価方法として用いる場合は、授業の評価場面での児童生徒の様子をデジタルカメラやビデオカメラで撮影したものを評価資料(表2)として用いることも考えられる。

3. 今後の課題

モデレーションプログラムでは、評価規準の文言と具体的な評価資料とを併記した評価実例集を兼ね備えているため、教師はそれを参照して評価を簡便に行うことができ、評価の信頼性を高めることが可能になると考えている。

今後は、モデレーションプログラムの有効性を検証したり、作成した評価実例集を他の教師が使う場合に評価の客観性を向上させることができるかどうか検証したりする必要がある。

また、欧米で行われているように、評価実例集を基にしてモデレーションを行い、評価の統一を図っていくことやこのようなプログラムを教育委員会や教育センターを通じて、各学校に

表3 グループ・モデレーションの展開

評価の力量を高め、評価の統一を図る工夫 (担当教師で協議)

評価の観点：外国人との日常会話の知識・理解
 評価規準：オフィスで外国人に接する場面でのコミュニケーションに関する基礎的な・基本的な知識を身につけ、販促シート(POP)・CMの製作ができる。

上記の評価の観点と規準を考慮しながら外国人との日常会話の知識・理解を評価するために、次のような四つの具体的な評価項目を決定した。

1. 創造性・創作性 (Creativity&Contents)
2. デザイン (POP Design)
3. 購買意欲 (Attraction)
4. 英語 (English)



あるクラスの行動を上記の四つの評価項目で採点し、(A) 十分満足できる (B) おおむね満足できる (C) 努力を要するの判断基準を次のように決めた。

(A) 十分満足	(B) おおむね満足	(C) 努力を要する
外国人向け販促シート(POP)を製作する上で、POP製作の基礎的な・基本的な知識を身につけ、英文POPに必要な様々英語を適切に使って製作できる。	外国人向け販促シート(POP)を製作する上で、POP製作の知識を身につけ、英文POPに必要な様々英語を使って製作できる。	外国人向け販促シート(POP)を製作する上で、POP製作ができず、英文POPに必要な英語がわからない。

効率的に評価するための工夫

あらかじめ、販促シート(ワークシート)をチェックするポイントを上記の四つ評価項目を決めておき、AT (Assistant Teacher) とその点をチェックしていった。さらに、客観性を高めるために、生徒間の相互評価表や自己評価表を作成しておき、確認した。



評価の実際



(A) 十分満足できる：外国人向け販促シート(POP)を製作する上で、POP製作の基礎的な・基本的な知識を身につけ、英文POPに必要な様々英語を適切に使って製作できる。

- 英文がしっかり翻訳できている。
- 創造性・デザイン性もよい。
- 相互評価にて一番人気である。

表3-1

において活用されるように呼び掛けていくことが重要となってくる。

都道府県内の教育委員会や教育センター、各学校が教科・単元・授業を分担してプログラムを実施すれば、全校種、全教科、全学年の評価実例集を完成させるのも難しいことではない。

その評価実例集を共有すれば、都道府県内の評価の客観性を高めることができるだろう。さらに、このプログラムを用いて評価実例集をインターネット上に提示し、全国の教員が共有できれば、全国規模で評価の客観性を高めることができると考えている。

〈参考文献〉

「評価の客観性を高めるモデレーションプログラム」
 岡山県教育センター
<http://www.edu-c.pref.okayama.jp/kenkyu/shoin/h15seika/kiyoPDF03/03sasaki.pdf>

(B) おおむね満足：外国人向け販促シート(POP)を製作する上で、POP製作の知識を身につけ、英文POPに必要な様々英語を使って製作できる。

適切な英語表現でない

英語表現が間違っている

デザイン性はA段階に値する

(C) 努力を要する：外国人向け販促シート(POP)を製作する上で、POP製作ができず、英文POPに必要な英語がわからない。

英語表現がままならない

創造性、デザイン性はまったく感じられない

指導事項

- ・英文POP例をもう一度確認させ適切な表現を考えさせた。
- ・日本語であれば、どのような表現をするか考えさせ、翻訳させた。

成果と課題

- ・統一テーマで教材が功を奏して製作させやすくなった。
- ・完成イメージを与えることにより、表現力の豊かなPOP製作が見込めた。
- ・完成イメージを与える過ぎると単なる物まねにしかならないおそれがある。

表3-2